

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 川瀬智之

本論文は、身体性の現象学で知られ、また芸術論にも独自の思想を展開した現代フランスの哲学者、モーリス・メルロ＝ポンティ(1908-1961)の、1940年代の『知覚の現象学』から晩年の『見えるものと見えないもの』へといたる思索の展開を、1990年代半ば以降に新たに出版されはじめた講義ノートを中心とした遺稿をもたんねんに読み解くことで、一貫したものとしてとらえようとするものである。その際著者が注目するのは「奥行き」と「同時性」というふたつの概念の意味の変遷である。これらの概念に注目した先行研究がないわけではないが、これを主題的にとりあげ、一貫した思索の展開のなかに位置づけた研究はこれまでほとんどなかった。この意味で本論文は、あたらしい解釈の試みといえる。

本論文は5章からなる。第1章では『知覚の現象学』における「奥行き」の概念が、まずは知覚する身体と知覚される対象のあいだの距離として考えられていること、しかも現在の奥行きの知覚はかつてなされた知覚経験を背景にして可能となるから、現在の知覚は過去の知覚を同時的に含むということを明らかにしている。著者によれば、当初からメルロ＝ポンティの思想には「奥行き」の知覚の空間性に「同時性」という時間性が接合している。第2章では、この過去が現在に含まれる同時性のありかたを、メルロ＝ポンティに特有の「制度」という概念の分析をつうじて検討している。「制度」とは、歴史を形成する過去・現在・未来の関係性を名指す概念である。第3章では、メルロ＝ポンティがシェリングの自然哲学やベルクソンの「持続」の概念の再検討をつうじて、自然過程の時間性をも過去が現在に含まれる同時性としてとらえ、さらにハイデッガーの「存在」概念の再検討をつうじて、自然と歴史を「存在」に関係づけることを跡づける。最後の第4、5章では、晩年の『見えるものと見えないもの』を中心に、そこであらたに主題化されてくるメルロ＝ポンティに特有の「肉」という概念の意味を、それ以前の「奥行き」と「同時性」の概念の深化の結果として提示する。メルロ＝ポンティにおいて奥行きは、もはやたんに見る身体と見られる対象のあいだの距離にとどまらず、見る身体をもひとつの見られるものとして、他の見られるものとともに含みこむ世界の奥行きと同時性として捉え返される。メルロ＝ポンティは、見るものの身体においてそのつど経験される見える世界のこの奥行きと同時性を世界の時・空間の厚みとして、これを「肉」と呼び、また自然と人間の見る身体と見える世界の総体を「存在」と呼ぶ、というのである。こうして著者は、メルロ＝ポンティの思索の展開を、知覚「主体」とその背後に潜む「意識」の哲学からの脱却の過程と結論づけている。

本論文は、「奥行き」と「同時性」という概念の意味の変遷に注目することで、メルロ＝ポンティの思索の展開をあきらかにすることに成功している。彼の晩年の難解で、ややもすれば神秘的な響きをもつ「肉」や「存在」の概念についても、なお十分に明確にしているとはいえないにしても、極力テキストに即してその具体的な意味の層を探り当てようとしている点は評価できる。設定されたテーマのゆえに、芸術の問題を主題的にとりあげることができなかったのは今後の課題として残るが、本論文は全体として、メルロ＝ポンティの哲学の理解にあらたな座標を提供するものとして評価することができる。よって、本審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位を授与するにふさわしいとの結論に達した。

(別紙2)